

序

今から1200余年の昔、わが国の首都として栄えた平城京は、わずか70年あまりで廃都となったとはいえ、当時世界に名だたる本格的都市であった。廃都以降その大部分が田畑となっていたが、南都諸大寺を中心に今日に至るまで都市として続いている。

近年市街地の拡大に伴ない、旧態を残す田地の多くは宅地等に変わり、平城京の遺構が未調査のまま失われていく例が多い。その中で当研究所平城宮跡発掘調査部では、平城宮の発掘調査はもとより、京内の数10個所においても発掘調査を行っており、平城京研究の一翼を担ってきている。

今回の奈良郵便局移転計画用地の発掘調査は、近畿郵政局の依頼にもとづいて行なったものである。この地は平城京左京三条四坊七坪に該当するが、いまでは奈良市の新市街地として近年特に開発の進行している地域であり、そのような状況下にあって今回の調査は坪の $\frac{1}{4}$ ほどを全面的に発掘することができたことは重要で、関係者に深く感謝したい。

調査の結果、この地は奈良時代を通して利用されていることが判明した。特に奈良時代の中頃から後半にかけて、ここで我国最初の銅貨である和同開珎を鑄造していたという新事実、更には、造営当初から坪中央に東西の小路が存在していたという事実は、今後の平城京研究に重要な資料を提供したといえよう。

これらの事実は、庁舎建設のための事前調査によって偶然に発見されたものである。本来、平城京の発掘調査は、平城京究明を目的として計画的に行なわれるべきものであることはいうまでもない。また、一方で、その重要遺構の保存策をも積極的に講ずる必要があるであろう。今回の調査でもあらためてそのことが痛感される。今後とも京内において、組織的計画的な調査が行なわれることを願ってやまない。

1980年3月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足